



近代の超克

ホー・ツーニェン

1942年3月4日夜、京都・円山公園の料亭「左阿彌」で開催された座談会「東亞共榮圏の倫理性と歴史性」（参加者：高坂正顕、高山岩男、西谷啓治、鈴木成高）から、下記の2カ所を引用する。

1.

高坂：それは、支那のひとが誤解してゐると思ふ。いまの話、日本が偉くなつたのは、泰西の文明を上手に取入れたから強くなつたのだといふ話だがね。支那へのヨーロッパ文化の翻譯といふものは、直接的な翻譯よりも、日本からの重譯が相當多かつた。ところが日本がこつちで取入れたといふ精神は問題にしないで、ヨーロッパのものをただ取入れたらいい、といふやうに考へてゐる。この點に大變な違ひがあるのではないか。

西谷：いま思ひでしたが、ヨーロッパへの船の中でね、上海にゐるフィリッピン人が、その人が、日本は非常に羨ましい、フィリッピンも日本のやうになりたい、だから自分達も西洋の文明を十分に取入れなければならない、と言ふんだ。僕はそのとき心の中で思つたんだ、話はさう簡単ではないとね。日本には永い歴史を通しての精神的陶冶といふものがある。日本それ自身、ヨーロッパ文明が來る以前に、非常に高い精神的文化があり、しかも非常に活潑な生命力が生きて動いてゐた。フィリッピンにはそれがないから、同じヨーロッパ文明を取入れるといつても、そこに非常な違ひが出来る。」
（『中央公論』第57巻4月号、1942年、中央公論社、p.130）

2.

西谷：僕一つ言ひたいことがある。全然別な問題だが、大東亞圏を建設するのに日本の人口が少な過ぎる。何年かの後に日本が一億何千萬人かにならなければやつて行けない、といふことが問題になるわけだが、その際、大東亞圏内の民族で優秀な素質をもつ

たものを、いはゞ半日本人に化するといふことは出来ないものかと思ふんだ。それも支那民族とかタイの國民とかは、個有の歴史と文化をもつたものだから、これはやはり一種の同胞的な關係で、半日本人化といふことはやれない。またフィリッピン人のやうに自分の文化といふものは何ももたずに、然も今までアメリカ文化に甘やかされて來た民族といふものは、恐らく一番取扱い憎い。それに對して、自分自身の歴史的文化をもつてゐないが、然も優秀な素質をもつた民族、たとへばマレー人なんか、よく知らないが相當優秀な.....

鈴木：インドネシャンでせう。

西谷：さう、とにかくなかなか優秀な素質をもつてゐるとも聞く。ハウスホーファーなんかマレー族を貴族的民族といつてゐる。日本人にもその血が混入してゐるといふんだがね。で、ああいふ民族とか、フィリッピンのモロ族などもいゝさうだ――さういふ素質のいゝ民族を少年時代からの教育によつて半日本人化するといふことは出来ないかと思ふんだ。

(『中央公論』第57卷4月号、1942年、中央公論社、p.161)

関連ワード

日本とアジア、ホー・ツーニエン